



2400万人目の入館者を迎えました

2024年1月30日に、2400万人目の入館者をお迎えしました。2400万人目は、修学旅行で来館した東京都立足立新田高校2年生の林和哉さんです。林さんには、普天間朝佳館長から認定証と記念品が手渡されました。林さんは、急なことに戸惑いながらも、「戦争は意味がない。平和であり続けることの大切さを学びたい」と感想を述べました。

普天間館長は、「戦争の実相を知ってもらって今の問題をどう考えるのか、どう声をあげたり行動していけばいいのかを考えていくスタートにしてほしい」と話しました。

今年は当館の開館35周年の節目の年にもあたります。今後も、多くの入館者に「平和であり続けることの大切さ」を発信していきたいと思います。

CONTENTS 目次

- | | | | |
|-------------------------|----|--------------------------|----|
| ◆ 2400万人目の入館者を迎えました | 01 | ◆ コラム相思樹 | 05 |
| ◆ 開館35周年を迎えて | | ◆ ハワイ・オアフ島で特別展とワークショップ開催 | 06 |
| ―平和であることの大切さを発信し続けるために― | 02 | ◆ ここに注目 沖縄戦中のひめゆりの生徒の服装 | 10 |
| ◆ トピックス | 04 | ◆ 仲宗根政善日記抄(68) | 14 |
| ◆ 2024年度の主な事業・イベント・出版 | 05 | ◆ 本棚(仲程昌徳) | 15 |
| ◆ 資料館の動き | 05 | ◆ 統計に見る2023年度 | 16 |

開館35周年を迎えて ―平和であることの大切さを発信し続けるために―

ひめゆり平和祈念資料館 館長 普天間朝佳

◆コロナ禍に寄せられた多大なご支援

本年 6 月 23 日、ひめゆり平和祈念資料館は開館 35 周年を迎えます。

当館は、2020 年から 22 年にかけてのコロナ禍で入館者が激減し、一時は存続が危ぶまれるほどの危機に直面しました。一方で、当館の困窮を知った多くのみな様が、ご支援とともに励ましの言葉を寄せてくださり、何とか乗り切ることができました。これほど多くの方々が、ひめゆり平和祈念資料館をなくしてはならないと思ってくださっているのだと改めて実感し、胸が熱くなりました。

みな様からの多大なご支援のおかげで、無事 35 周年を迎えることができました。職員一同、心より感謝申し上げます。

◆様々な方々が沖縄戦に出会う場

当館は沖縄戦に動員されたひめゆり学徒隊の戦争体験を伝える平和博物館です。学徒隊生存者たちと同窓生たち（ひめゆり同窓会）によって、1989 年 6 月 23 日に設立されました。

開館以来、たくさんのみな様にご来館いただき、1 月 30 日には、2400 万人目の来館者をお迎えしました。来館者のほとんどは県外の方で、半数近くは高校や中学校の修学旅行生ですが、一般の方も少なくありません。ひめゆり平和祈念資料館は、様々な方々が沖縄戦の歴史と記憶に出会う場であり、沖縄の平和学習に欠かせない場所となっています。

◆体験者から非体験者への次世代継承

元ひめゆり学徒たちは資料館をつくっただけでなく、その後の運営も自分たちの手で行ってきました。資料館内外で戦争体験を伝える活動に積極的に取り組むとともに、資料館のあらゆる仕事に携わり、館運営を担ってきました。

彼女たちはまた、自分たちがいなくなっても戦争体験を未来にわたって伝え続けていくために、次世代継承にも取り組みました。現在、元ひめゆり学徒は 95 歳以上になり、資料館の運営や戦争体験を伝える活動は、彼女たちからバトンを受け取った私たち戦後世代の職員に引き継がれています。

◆展示リニューアルと主体的な学びの開発

3 年前の 2021 年、当館は 2 回目のリニューアルを行いました。戦後 75 年以上が経ち、戦争からさらに遠くなった世代にはこれまでの展示では伝わりにくくなっているのではないかという問題意識を持ち、展示を変えることにしたのです。



展示室で説明する元ひめゆり学徒 2015 年



元学徒の館長から初の戦後世代の館長へ 2018 年



リニューアルした第1展示室「ひめゆりの学校」 2021 年

リニューアル後の展示は、見やすくなった、分かりやすくなったと好評です。

しかし、展示を見たり、話を聞いたりというだけでは、どうしても受け身的になってしまいがちです。戦争と平和の問題をもっと「自分ごと」として受け止めてもらうためにはどうすればよいかを模索する中で始めたのが、主体的で能動的な学びの開発です。

その具体的なものとしては、ひめゆりをテーマにした映像作品を募る「映像コンテスト」やフィールドに出て平和の礎と関連した学びを行う「ワークシート」の開発、そして、「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」などがあります。

◆館外・海外への発信

近年は、館外や海外への発信に力を入れています。2023年9月から、ハワイ・オアフ島の各地で「ひめゆりとハワイ」というテーマの展示会を開催しています。また、2022年10月には沖縄本島北部の今帰仁村で、11月には中部の読谷村で移動展を開催しました。いずれの会場にも多くのみな様が足を運んでくださいました。展示への理解を深めてもらえるように、会場でワークショップも実施しました。今年の5月31日より、久米島で展覧会を行っています。初の離島開催です。今後も石垣や宮古などでの移動展を予定しています。

◆「第11回沖縄平和賞」を受賞

2022年10月22日には「第11回沖縄平和賞」を受賞いたしました。授賞式では、長い間平和構築のために力を尽くし当館の中心となってきた元ひめゆり学徒の活動への評価と、館の活動のさらなる発展に期待が寄せられました。当館の活動を長年支え続けてくださったみな様の思いが、受賞に結びついたと感謝しております。

◆二度と沖縄を戦場にしないために

現在、沖縄では、「台湾有事」をめぐって、軍備が増強され、日米軍の一体化が進められ、離島の住民を日本本土に避難させる計画が立てられるなど、まるで沖縄が戦場になることを想定しているかのような動きが強まっています。

二度と戦争を起こしてはならない、二度と沖縄を戦場にしないといけないというのが、沖縄戦を体験した方々の切なる思いです。

私たちは、その思いを受け継ぎ、平和であることの大切さを発信し続けていくために、これからも様々な取り組みを行ってまいります。

今後ともみな様の変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。



移動展「ひめゆりと今帰仁」でのワークショップ 2022年11月19日



「オキナワン・フェスティバル」(ハワイ)での展示会 2023年9月



第11回沖縄平和賞を受賞 2022年



元ひめゆり学徒と資料館職員 2018年

■「第6回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」受賞作品決定

「第6回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」受賞作品が決定しました。

ひめゆり映像賞は、晃華学園高等学校 A チームの「同じ年のふたり」が受賞しました。戦争中のひめゆり学徒と現代の高校生を場面ごとに比較したアニメーション作品です。見る側に、同じ年齢なのにこんなに違う、と気づかせるような構成が評価されました。特別賞は、馬場雪乃さんの「ひめゆりと私、感情」です。ひめゆり学徒と同年代の主人公が、ひめゆり学徒が追い詰められた海岸まで歩き追体験したドキュメンタリー作品です。ひめゆり学徒隊を初めて知った感情を素直に表していることが評価されました。

4月2日、晃華学園高等学校の修学旅行での来館を機に、映像賞の表彰式を行いました。普天間館長から、表彰状と賞金5万円が授与されました。受賞者代表の新井美花さん、八木晴夏さんは、受賞を喜び、この作品を通して若い人たちに今と昔の違いを知ってもらいたいと話しました。

今回、当コンテストが修学旅行の事前学習において活用されている様子が見られました。今後の広がりも期待されます。

映像コンテストは今年も開催予定です。募集開始はホームページにてお知らせします。たくさんの作品をお待ちしています。

作品は当館公式 YouTube チャンネルよりご覧になれます。



ひめゆり映像賞受賞作品「同じ年のふたり」



受賞した晃華学園高等学校 A チーム
左から八木さん、新井さん、普天間館長



特別賞受賞作品「ひめゆりと私、感情」

■開館35周年記念移動展「ひめゆりと久米島」開催

2024年5月31日(金)から6月30日(日)まで、久米島博物館の協力を得て、開館35周年記念移動展「ひめゆりと久米島」を開催します。県内での移動展は、2022年度の今帰仁村と読谷村に次いで3か所目、離島では初めての開催となります。

移動展「ひめゆりと久米島」の展示は、「ひめゆりの沖縄戦」、「久米島出身のひめゆりの生徒たち」の2部構成です。ひめゆり学徒隊の概要にあわせて久米島出身の生徒を紹介します。13～15歳で島を離れ、勉学に励んでいた久米島出身の生徒たちですが、9人が動員され5人が死亡、そのほか在校生1人がなくなりました。今回の展示では、生徒たちの学校生活や戦争中の状況などを伝えます。

先に今帰仁、読谷で開催した移動展では、地域出身の生徒を知ることで沖縄戦がより身近になった、地域の子どもたちにも知ってほしいなどの感想が寄せられました。移動展「ひめゆりと久米島」が、久米島出身のひめゆりの生徒たちを知る機会となり、戦争や平和について関心を持つきっかけになってくれることを願っています。多くのみなさまのご来場、お待ちしております。

ひめゆり平和祈念資料館開館 35 周年移動展 ひめゆりと久米島

【期間】2024年5月31日(金)～6月30日(日)

【会場】久米島博物館

主催：ひめゆり平和研究所 共催：久米島博物館

〈展示内容〉

ひめゆりの沖縄戦

- ・ひめゆりの沖縄戦
- ・ひめゆりの学校
- ・沖縄戦の概要
- ・ひめゆりの戦場
- ・沖縄戦全体のまとめ
- ・ひめゆりの戦後

久米島出身のひめゆりの生徒たち

- ・希望を持って那覇の学校へ
- ・ひめゆり平和祈念資料館での活動
- ・久米島の戦争

■ 2024(令和6)年度の主な事業・イベント・出版

当財団は 2024 年度に、以下の事業およびイベントをおこないます。

- ▶ 開館35周年記念移動展「ひめゆりと久米島」開催（2024年5月31日～6月30日）
- ▶ 「第7回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」（夏頃募集開始予定）
- ▶ 高校生が同世代に伝えるためのワークショップ
- オンライン教員向け講習会、ガイド向け講習会、報道機関向けレクチャー
- 編集・発行 『感想文集ひめゆり第35号』、『年報第35号』、『資料館だより』第73号・第74号

■ 資料館の動き（2023年11月～2024年5月）

2023年

- 11月25日・26日 クラフトフェア（於：ハワイ・ハワイ沖縄センター）にて特別展「ひめゆりとハワイ」開催
- 12月23日 沖縄県主催「令和5年度沖縄平和賞シンポジウム」（於：那覇市）に館長の普天間朝佳が登壇
- 12月27日・29日～1月8日 冬休みガイダンス実施（計24回）

2024年

- 1月12日 ハワイにて開催中の特別展「ひめゆりとハワイ」関連ワークショップを、ハワイ大学西オアフ校図書館で実施。学芸課長の古賀徳子と株式会社うなゐ沖縄代表玉城直美がファシリテーターを務める。翌13日にはハワイの日本人学校レインボー学園にて実施。
- 1月28日 沖縄県主催「沖縄のこころ 平和啓発シンポジウム」（於：神奈川県川崎市）に館長の普天間朝佳が登壇
- 1月30日 入館者2400万人を迎える（足立新田高校林和哉さん）
- 2月26日 沖縄県主催「令和5年度 沖縄平和賞 次世代ワークショップ」（於：小禄高校）の講師を学芸課長の古賀徳子が務める
- 2月27日 「第6回”ひめゆり”を伝える映像コンテスト」選考委員会開催。ひめゆり映像賞、特別賞の2作品決定
- 2月27日 2024年オーキッドバウンティ贈呈式に館長の普天間朝佳が出席。支援金100万円が授与される。
- 3月19日 2023年度ガイド講習会開催（参加者：62名）
- 3月23日 「沖縄戦の記憶継承プロジェクト－戦争をしない／させないために」（同プロジェクト主催 於：当館）第2期8回目の講師を学芸課長の古賀徳子が務める
- 3月23日 沖縄県文化振興会事業報告会イベント「YUUREEGWa 2023>2024」（於：那覇クルーズターミナル）にて、令和5年度沖縄文化芸術の創造発信支援事業「ひめゆり」を伝えるワークショップ開発・実践プロジェクトについて平和研究所所員（兼任）の宮城奈々が報告
- 3月25日 「第6回”ひめゆり”を伝える映像コンテスト」受賞作品をホームページにて発表。4月2日にひめゆり映像賞受賞者、晃華学園高等学校Aチームに表彰状授与（修学旅行にて来館）
- 4月 3日～7日 春休みガイダンス実施（計9回）

コラム 相思樹

亡くなった久米島出身の生徒と
ご遺族のこと

学芸員 前泊克美

「母様、色々の品々、誠にありがとうございまして。運動会も無事に二十九日終へて、もう試験も目の前に迫ってまいりました。今月の十三日頃から初まるよいです。今から勉強に精出して居ります」久米島での展示会準備で、久米島出身の生徒たちの資料を読み直しています。右は、新垣奈枝のハガキの一部です。奈枝の手紙類には、音楽会や、新しい校服、お小遣いが足りないなど、日常の細々としたことが書かれています。内間シマ子は、沖縄戦直前の手紙のなかで「最後まで学校と運命を共にする」だろうと書きつつも、家族や親類の顔が「絵巻物のように頭の中を往來する」と寂しさを綴っています。戦場に動員された奈枝とシマ子は、いまだ消息不明のままです。

久米島での調査で、ご遺族にお会いすることができました。弟妹たちは当時まだ幼く、姉との具体的な思い出はあまりないようでしたが、戦後の親の姿や年長のきょうだいから聞いた話などを教えてくれました。戦争で家族を失ったことの大きさを改めて感じる時間になりました。今回の移動展は、久米島出身の生徒たちを郷里久米島で紹介する初めての機会です。彼女たちの生きた証を伝え、戦争の悲惨さを改めて訴えることが、話を聞かせてもらった私の責任だと思っています。

ハワイ・オアフ島で特別展とワークショップ開催

ひめゆり平和祈念資料館学芸課長 古賀徳子

取り組みの経緯

ひめゆり平和祈念資料館附属ひめゆり平和研究所は、現在ハワイ・オアフ島で特別展「ひめゆりとハワイ」を開催しています。これは「沖縄戦・ひめゆり学徒隊の歴史を海外に伝える展示プロジェクト」の第一弾です。

ハワイと沖縄にはさまざまな共通点があります。戦前だけで約2万人が沖縄からハワイに移住し、今も沖縄にルーツをもつ県系人の大きなコミュニティが存在します。さらに、ひめゆりには以下のような関わりがあります。

- ① ひめゆり学徒隊の引率教師の一人で、ひめゆりの塔の壕で亡くなった親泊千代子がハワイ生まれだった。
- ② 戦後、ハワイ生まれの2世、ハリー儀間真一がひめゆりの塔の敷地の購入資金をひめゆり同窓会に寄贈し、自らもその整備に尽力した。
- ③ 戦後、ハワイに渡ったひめゆりの同窓生が「ひめゆり同窓会ハワイ支部」を結成して活動した。

2019年度から沖縄県・公益財団法人沖縄県文化振興会「沖縄文化芸術の創造発信支援事業」の支援を受けて、事前調査や展示制作に取り組み、2021年度の開催を予定していましたが、新型コロナの世界的流行により、ハワイでの開催を延期しました。その代わりに2021年10月1日から2022年2月28日まで、ひめゆり資料館で特別展「ひめゆりとハワイ」を開催し、同時に専用のホームページを立ち上げ、ウェブ上で特別展の内容を公開しました。

その後、展示パネルを利用して、2022年度には県内の今帰仁村と読谷村で移動展を行いました。

- 「ひめゆりと今帰仁」展（10月21日～11月20日、今帰仁歴史文化センター）



「ひめゆりとハワイ in 読谷」展の「読谷出身のひめゆり学徒」コーナー

- 「ひめゆりとハワイ in 読谷」展（11月26日～2023年1月9日、ユンタンザミュージアム）

県内での移動展はひめゆり資料館にとって初めての取り組みでした。最初の開催地を今帰仁村に決めた理由としては以下の点が挙げられます。

- ① ひめゆり学徒隊を引率した教師の中に今帰仁出身者が2人（仲宗根政善、与那嶺松助）いた。
- ② ひめゆり学徒隊の生徒・教師240人のうち今帰仁村出身者が16人いた（そのうち8人が戦死）。
- ③ 戦後、当館や地域でひめゆりの戦争体験を伝えてきた今帰仁出身者がいる。

次の開催地を読谷村にした理由は以下のとおりです。

- ① ハリー儀間真一さんは読谷村にルーツを持つ2世である。
- ② 読谷村からは10人の生徒がひめゆり学徒隊として動員された（そのうち7人が戦死）。
- ③ 戦後、当館の設立や証言活動に奔走した読谷村出身者がいる。

展示の前半は「ひめゆりと沖縄戦」、後半はそれぞれの地域出身者を取り上げました。今帰仁村や読谷村からひめゆりの学校に進学した生徒がいたことや、彼女たちの戦争体験、戦後の活動などを紹介しました。今帰仁村では「今帰仁という場所を通して見ることでより伝わった。ぜひ他の地域出身の学徒のことも知りたい」「引率した先生方の自責の念も含めて、戦争というものをもう一度考えてみなければならなかった」と感じた、読谷村では「地元読谷村からひめゆり学徒として多くの方が戦場で活動していたと知って、身近な存在の人々が実際に経験してきたことなのだと感じた」などの感想が寄せられました。

県内での移動展は、2024年5月31日から6月30日まで久米島博物館で開催しています。その後も、石垣や宮古で開催予定です。

ハワイ・オアフ島の4か所で開催

2023年度にはハワイ・オアフ島の4か所で特別展が開催されました。1番目の会場は9月2・3日に、アラモアナ地区のコンベンションセンターで開かれた「オキナワン・フェスティバル」（ハワイ沖縄連合会主催）です。ハワイで沖縄

の音楽や踊り、食文化が体験できることから、地元の方々が大勢集まる人気のイベントです。新型コロナが落ち着き、3年ぶりに対面で開催されました。ひめゆり平和祈念財団の仲程昌徳理事長と担当の狩俣英美が現地に入り、会場設営や来場者への対応を行い、両日ともミニ講演会を実施しました。

特別展の会場には、グリーン州知事や沖縄県系3世のイグ前知事を始め、2日間で約700人が訪れました。80人の来場者からアンケートが寄せられ、「心を揺さぶる内容だった。米軍の側の話しか知らなかったが、生徒たちがこういう悲劇を体験したことはとてもひどいことだと思った」「いつかひめゆり資料館を訪れたい」などの声がありました。NHKやKZOO（ハワイ州公認日本語ラジオ局）、沖縄タイムス、琉球新報からの取材を受けました。

2番目の会場はカポレイ地区にあるハワイ大学西オアフ校（以下、西オアフ校）ジェームズ&アビゲイル・キャンベル図書館です。9月5日のオープニングセレモニーから2024年1月31日まで、約5か月間という長期の開催となりました。西オアフ校名誉教授のチネン・ジョイス博士、加藤マサヒデ准教授、図書館司書のカーリーナ・チャーニスキーさんのご協力により実現しました。開催に当たって、「ハワイ大学西オアフ校に沖縄の平和資料館の展示がやってくる」（2023年8月31日付）と題する記事が図書館のホームページに掲載されました。その中で、加藤准教授は特別展の意義として、以下の点を指摘しました。

- ① 琉球王国とハワイ王国は、それぞれ19世紀後半に日本とアメリカに不法に併合された歴史を持つ。
- ② 沖縄県民もハワイ先住民も、過疎化、移住、脱文化化、そして神聖な自然景観の破壊に耐え、レジリエンス（回復力）、文化の復興、正義のための非暴力的な行動によって、その苦境を乗り越えてきた。
- ③ 「ひめゆりとハワイ」展は、戦争と長期占領が交錯する奈落の底へと私たちを連れて行く。これは自らに課した沈黙を破り、記憶の保存と平和のメッセージの普及の



左から、東西センターのジョン・田里さん(議長)、アニー・レイノルズさん(学芸員)、ひめゆり平和祈念財団理事長の仲程昌徳、担当者の狩俣英美、ハワイ大学沖縄研究センターの石田正人教授 2023年9月

ためにひめゆり平和祈念資料館の設立に尽力した生き残った生徒たちの物語でもある。

西オアフ校の特別展には、図書館を利用する学生や一般の方が訪れ、オンラインや紙のアンケートに合計31人から回答が寄せられました。「戦争の恐ろしさを思い起こさせる非常に感動的な作品だ。洞窟の中で何が起きていたのか、少女たちがしていた仕事は何だったのか、私は知らなかった。ガザでは歴史が繰り返されている。私たちはいつか学ぶことができるのだろうか?」、「このパワフルな展示を私たちに提供してくれてありがとう。このひめゆり体験記が、アメリカ全土、そして世界中を駆け巡ることを願っています。現在も続く戦争による悲劇的な苦しみは、隠すことができません。」などの声がありました。特に、ひめゆり学徒隊の体験者で、戦後ハワイで生活していた末富文子ジャニス（旧姓玉城）さん（2022年8月に92歳で逝去）のお子さんやお孫さんが見学に訪れ、たくさんの感想を残してくれました。長女のベティ末富さんから、「私の母の物語を見つけ、この展覧会を通して母の過去を再び思い起こすことができました。展示は非常によくできていて、整理されていました。ひめゆりの物語をより多くの人に知ってもらうために、ハワイでこのような展示会を開いていただき、本当にありがとうございます。」とのメッセージをいただきました。

3番目の会場は、ハワイ沖縄連合会があるハワイ沖縄セン



ハワイ大学西オアフ校図書館での展示風景
アニメ「ひめゆり」の上映も好評だった



ハワイ沖縄センターで展示パネルを設営してくださったハワイ沖縄連合会の職員の方々 2023年11月
写真提供 ハワイ沖縄連合会

ターです。11月25・26日の「クラフトフェア」というイベントに合わせて、西オアフ校から一時的に展示パネルを移動しての開催でした。

4番目の会場は、ホノルルの中心部にあるハワイ大学マノア校ハミルトン図書館です。2024年2月15日から6月30日まで、エレベーターギャラリーで開催しています。その後も、ハワイ大学等の諸機関と協力し、ハワイ大学の各サテライト・キャンパスで開催予定です。

ワークショップを2か所で開催

今年1月、特別展関連企画のワークショップを行うため、私と玉城直美さん（株式会社うなあ沖縄代表）が沖縄からハワイに向かいました。

1月12日には西オアフ校図書館で、1月13日には「レインボー学園」でワークショップを行いました。西オアフ校には、ハワイ大学の学生、学校の先生、退役軍人、ストーリーテラー、ハリー儀間真一さんの親戚など、個性豊かな方々14人が集まりました。

ワークショップは、開発教育の専門家である玉城さんが進行を担当し、私は解説や質疑応答を担当しました。ハワイ大学沖縄研究センターの石田正人教授、イダ侑子さんが通訳に入り、話し合いを活発なものにしてくれました。

ワークショップでは、①ひめゆり入門Q&A、②フォトランゲージ、③感想・意見交流を行いました。フォトランゲージとは、写真の観察を通して情報を読み解く力をつける学習方法です。参加者は2～3人のグループに分かれて話し合い、

写真にタイトルをつけて発表しました。

高校の社会科の先生からは「魅力的な質問と回答から始まり、過去の出来事や人々との関連付けを助けるフォト・ランゲージ・アクティビティも良かった」「高校生の生徒たちと同じようなフォトランゲージの活動をするつもりです」との声が寄せられました。

第二次世界大戦の日系人部隊について伝える活動をしている参加者は、ひめゆりの生徒の部活動の写真を見て、「当時の若い女性にとって非常に先進的だった活動で、生徒たちがさまざまな経験をしていたことが印象的だった」と語りました。また「バケツリレーの消火訓練」の写真では、女子生徒までもこのような訓練で軍事化されていたことに衝撃を受けたと述べました。

ハワイの日本人学校でも、バケツリレーの訓練があったことをチネン・ジョイス名誉教授が教えてくれました。

ストーリーテラーとしてひめゆりの物語を伝えている方は、「専門家に質問を投げかけるエキサイティングな機会だった。多くのことを学び、ひめゆりの物語に関する多くの誤解を解くことができた。こうした誤解のいくつかは、ハワイの沖縄コミュニティにも残っているのかもしれない。私は全米の聴衆にひめゆりの話をしますが、この新しい情報をもとに台本を調整するつもりです。このような機会を提供していただき、ありがとうございました。」と感想を送ってくれました。

沖縄をよく知る高校の歴史の先生からは、ひめゆりの生徒が「絶対に捕虜になってはいけない」と思っていたのは、「捕虜になるのは恥」という考え方や「米軍は残酷」という宣伝だけでなく、捕虜になると日本軍に処刑されると聞かさ



ハワイ大学西オアフ校図書館でのワークショップ



参加者のみなさんと 西オアフ校図書館



フォトランゲージで使った写真。
参加者が考えたタイトルを書きこんである



レインボー学園でのワークショップ 2024年1月13日

れていたためではないかとの質問がありました。そうした証言は多く残されており、ひめゆりの生徒の中にも、投降しようとして日本軍に射殺された日本兵を目撃した人がいたことをお話しました。

開始前は、ワークショップに参加してくれるのはどんな人だろう?という期待と不安、わざわざハワイに行くからにはワークショップを成功させなくては…という気負いや緊張などの気持ちがありました。しかし、海外での実践経験が豊富な玉城さん、石田教授、イダさん、そして参加者のみなさんのおかげで、実りあるものとなりました。私にとっては、参加者の疑問や発言に耳を傾けて、お互いに意見を交わし合う、そうした時間を過ごすこと自体に意味があると感じる、貴重な経験となりました。

後日、イダ侑子さんから「参加者の皆さまは展示を読むだけでは得られないたくさんの知識を得、考えを深めることが出来たと思います」との感想をいただきました。石田正人教授からも「ワークショップはたいへん有意義な対話の機会でした。参加者と歴史的空間の共有をお楽しみ頂けたことは、私たちにとって望外の収穫でした」とのメッセージをいただきました。

1月13日には、ハワイ在住の日本人のための学校「レインボー学園」の中学3年生を対象に、ワークショップを行



日本の降伏調印式が行われた戦艦ミズーリ号。沖縄戦にも参加し艦砲射撃を行っていたことを初めて知った。巨大な砲身を目の当たりにして、ここから放たれた艦砲射撃の下を逃げ回ったひめゆりの体験者の姿を想像した。

いました。主な内容は、「ひめゆり入門 Q&A」と「フォトランゲージ」でした。

事前学習で「アニメひめゆり」を見ていた生徒たちは、沖縄戦についてイメージしやすかったようです。「いつもの授業では、起こった歴史を覚える事に必死だったが、今回のワークショップで、心で考える、戦争を経験した人達の気持ちを考える事がどれだけ大切なのかが分かった」「体験者がどういう思いで資料館を設立し、自分たちの経験を伝えたかが理解できた」など、鋭い感性で受けとめ、理解を深めてくれたことが伝わってきました。

生徒たちは、平日は地元の学校でアメリカの教育を受け、土曜日はレインボー学園で日本の教科書を使って学んでいます。週1回の授業の中で特別に時間を取るのとは簡単なことではなかったと思いますが、学務長の代田理恵先生のご尽力でこのワークショップが実現しました。また、代田先生には、パールハーバーの戦艦ミズーリ号、対馬丸を撃沈した潜水艦ボーフィン号の記念館、アリゾナ記念館を詳しく案内していただきました。

最後になりましたが、ハワイ・オアフ島での特別展とワークショップ開催に多大なるご支援をいただいたハワイ大学の石田正人教授を始め、ハワイ沖縄連合会、東西センター、ハワイ大学西オアフ校、ハワイ大学マノア校、レインボー学園のみなさまに、心から感謝申し上げます。



対馬丸を撃沈した潜水艦ボーフィン号 2024年1月11日
ひめゆり平和祈念資料館で長年活動された本村つるさんと津波古ヒサさんは、対馬丸の遺族でもあった。

特別展「ひめゆりとハワイ」は、ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館で6月30日まで開催しています。その後は、ハワイ大学の各サテライト・キャンパスを巡回する予定です。



ハワイ大学マノア校図書館での展示風景 写っているのは司書の照屋リネットさん。2024年4月5日

ここに注目 沖縄戦中のひめゆりの生徒の服装

「ひめゆり学徒隊」というと、どんな姿の人物を思い浮かべるでしょうか。その人物は、どんな服装をしていますか？戦時中の女学生ということで、防空頭巾をかぶり、もんぺをはいているかもしれません。上着は何を着ていますか？どんな履物を履いているのでしょうか。

本稿では、沖縄戦中のひめゆりの生徒たちの服装について紹介します¹。沖縄戦中の服装には、当時の社会や生活、戦争で追い詰められていく様子など、生徒たちがおかれていた状況がよくあらわれています。

ひめゆりの生徒たちの姿は、戦争直後から現在まで、映画や演劇、ドラマ、マンガ、イラストなど、さまざまなかたちで表現されてきました。それらのなかで示されるひめゆりの生徒たちの服装は、沖縄戦中の実際の生徒の服装とは異なっていることが多いようです²。その違いも意識して、当時、生徒たちが身につけていなかったものについてもまとめました。

※以下、ひめゆりの生徒たちの学校である、沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校はそれぞれ、「女師」、「一高女」と略記します。

もんぺともんぺの上着

1945年3月23日夜、ひめゆりの生徒たちは、沖縄陸軍病院に動員されました。安里の学校から南風原の陸軍病院へ向かうとき、生徒たちはもんぺを着ていました。もんぺは、ズボン状の作業着で、自分で縫って作りますが、古い着物などを解いた布地を使うため、それぞれ違った色や柄のものを着ています。物資不足は深刻で、男物の着物を更

生して使うこともありました。

上着は、多くの生徒が「もんぺの上着」を着ていました。もんぺの上着は、もんぺと同じように古着を更生して作った作業着です。「もんぺ」とは、本来、下にはくズボン状の服のことですが、生徒たちは、古着を活用して作る作業着という共通の特徴を捉えて、「もんぺの上着」と呼んでいました。もんぺの上着は、衿部分が着物のような打ち合わせになっていました³。【図2】

【図1】 沖縄戦中のひめゆりの生徒の服装一覧

頭	・防空頭巾：紺の布地。裏は古着を利用して作る
上衣	・もんぺの上着：古着を更生したもの ・軍支給のシャツ：陸軍の襦袢。詰め襟・カーキ色
下衣	・もんぺ：古着を更生したもの ・軍支給の袴下：陸軍の袴下。カーキ色
履物	・軍支給の地下足袋：布製ゴム底。二股または丸いつま先 ・運動靴：布製ゴム底。黒。普段履いているもの ・軍靴：革の編上靴。貰ったり拾ったりした
かばん	・救急鞆：布製。自作の肩掛け鞆。救急袋ともいう ・リュックサック：布製。自作
着がえ	・もんぺ、もんぺの上着 ・制服：大切に持っていた

支給品の襦袢と袴下

南風原の陸軍病院に到着後、生徒たちに軍のシャツとズボンが支給されました。生徒の証言では、「軍服」と表現されることもありますが、実際に支給されたのは、陸軍の襦袢（じゅばん）と袴下（こした）で、本来は、軍服の下に着るものです。どちらも薄手のやわらかい布地で、薄いカーキ色でした⁴。シャツは詰め襟です。シャツとズボンは男性用で、生徒たちには大きすぎるため、袖と裾を何度も折り



第2展示室 生徒の服装

【図2】 防空訓練 1943年度（戦争前）



右端手前の2人の生徒に注目。左の生徒は、もんぺ、もんぺの上着、防空頭巾を着用（動員時と同様の服装）。右の生徒は、運動服、もんぺ、三角巾を着用（普段の作業時の服装）。沖縄戦では右の生徒のような白い服は避けられた。もんぺは、古着（主に着物）を更生して作るため、それぞれ違った色柄のものを着ている。着こなしに個性が見られる。

曲げて着用しました。支給された時にこのシャツに着替えた人が多いようです。【図 1】【図 5】

救急靴とリュックサック、防空頭巾

陸軍病院へ向かう生徒たちは、救急靴（救急袋）を持ち、防空頭巾を着用していました。どちらも、沖縄戦になる前から空襲などに備えて日頃から携帯していました。救急靴は布製の小さなショルダーバッグで、斜めがけします。救急靴も防空頭巾も自分で縫って作りました。救急靴は古着を利用して作るため、色柄はそれぞれです。防空頭巾は、外側の布は紺色ですが、内側の布は自分で準備した古着などを使って作っています。【図 1】

生徒たちは、着がえなどを入れたリュックサックも持っていました。リュックサックもそれぞれが準備した布で制作します。古着を使うことも多かったようです。

素足に運動靴

学校を出るとき、生徒たちの多くは、黒い運動靴を履い

ていました。紐のない布製のゴム底靴です。靴は入手が難しくなっており、穴を繕って履いている生徒もいました。靴下は履いていません。靴下も入手困難で、日頃から素足に運動靴か下駄⁵を履いていました。【図 3】

支給された地下足袋ともらった軍靴

南風原の陸軍病院では、軍のシャツ、ズボンとともに、地下足袋が支給され、生徒たちはボロボロの運動靴から履き替えました。地下足袋は、ゴム底で、つま先が二股に分かれたものと、分かれていない丸いものがありました。地下足袋も生徒の足には大き過ぎたようです。雨のなか、飯あげなどで丘の斜面を移動したりするなかで、早々に壊れてしまった生徒もいました。【図 4】

軍靴は、革製の編み上げ靴で、兵隊が履いていました。生徒には支給されませんでしたが、戦場での 3 か月の間に、壊れるなどして履物を失った生徒は、親切な人に貰ったり、拾ったりして履いている場合もあります。軍靴もサイズが大きいため、歩きづらく、靴擦れをおこしました。軍靴は、

【図 3】運動服（戦争前）と運動靴



1942 年度の一高女 2 年生。沖縄戦以前の運動時の服装（沖縄戦の時には着ていない）。白い開襟の半袖シャツとブルマ。ハチマキは、おでこを覆わない巻き方で、運動時に着けていた。運動服は掃除や作業時にも着用した。



【図 3】部分拡大。運動靴がやぶれ、足の指が見えている。すでに靴が入手困難となっていた。靴でなくてもよいときは下駄を履く生徒も多かった。

【図 4】袴下と 2 種類の地下足袋（戦場で着用）



コザ収容所のひめゆりの生徒ら。1945 年 7 月。戦場で着ていた軍の袴下（ズボン）と地下足袋を身につけている。



【図 4】部分拡大。地下足袋は、つま先の形が 2 種類あった。

歩くとコツコツと音が鳴るため、静かに行動したいときには不都合でした。【図5】

制服

生徒たちは、制服の上着を荷物に入れて大切に持っていました。卒業式のためにと、普段は着用していなかった制服のスカートを持っていた人もいます。当時の制服は、セーラー服ではありません⁶。女師は、国が制定した「婦人標準服」甲型二部式二号が制服となっており⁷、一高女は、全国の高等女学校で統一されていたへちま襟の制服で、冬服はどちらも紺色でした⁸。【図6】【図7】

解散命令後、生徒たちは荷物を減らして壕を出ますが、制服を救急鞆に入れて最後まで持っていた生徒は少なくありません。戦場を逃げ回るなかで、いよいよ最期の時が迫ったと感じて制服に着替えた生徒もいます。亡くなった生徒に制服を着せることもありました。

校章

校章（徽章）は、もんぺの上着や、軍から支給されたシャツなど、着用している上衣に着けていました。大切に荷物に入れていることもあります。沖縄戦当時、師範学校の校章は全国統一のもので、布製、黄色を基調とした桜の形の刺繍でした。【図8】【図9】

【図5】軍靴と地下足袋



米軍に収容された日本軍の捕虜。ふたりはそれぞれ軍靴（左）と地下足袋（右）を履いている。左の人物が着ている軍の襦袢と袴下は、ひめゆりの生徒に支給されたものと同様のもの。1945年6月17日米軍撮影。沖縄県公文書館蔵写真「資料コード：0000112313、写真番号：12-54-1」の一部。

鉄かぶとをかぶって伝令に

南風原での飯あげや、南部撤退後の伝令など、壕の外に出るとき、生徒たちは、日本軍の鉄かぶと（鉄帽）をかぶせてもらっていることがあります。鉄かぶとは、南風原の陸軍病院では支給されていないため、ほとんどの生徒は持っていない⁹。借りたものを使っています。

衣服も地下足袋もボロボロに

生徒たちは、動員時に着がえは持っていたものの、ほとんど洗濯できず、お風呂にも入れないため、服は汚れ、傷んでいきました。頭には黒いシラミが湧き、服の縫い目には、白いシラミがずらっと並んでいました。砲弾の破片に当たるなどして大けがを負うと、服は、血だらけになるだけでなく、裂けたり破れたりします。大けがをして服がボロボロになった学友に、自分の服を着せた生徒もいます。戦場で服は貴重なものとなり、雨に濡れて干していた服が無くなることもありました。

解散命令後は、多くの生徒が荷物を減らして壕を出しました。着がえは持たなかった生徒は多いですが、服を重ね着して持ち出した生徒もいます。海岸で大波にのまれて、もんぺが脱げてしまった後輩に、重ねばきしていたもんぺを分けてあげた生徒もいました。大波は、地下足袋や防空頭巾、救急鞆などもさらっていきました。

【図6】女師の制服（上着）



第2展示室資料。1943（昭和18）年度から女師は婦人標準服が制服となった。スカートは儀式の日のみ着用し、普段はもんぺを穿いた。

【図7】へちま襟の制服（一高女生）



1941年度の新入生から、女師、一高女ともに、全国統一のへちま襟の制服となった。女師は1943年に全学年が標準服に変わったため、これ以降は、一高女生のみが着用した。写真は1942年度の一高女2年生。

地上戦の 3 か月の間に地下足袋も壊れてしまうことがありました。履物を失っては行動できないため、亡くなった学友の地下足袋をもらって履いた生徒もいます。地下足袋が壊れたり脱げたりして、裸足で海岸の尖った岩場を逃げると、足に大きな痛みをもたらしました。残ったゴム底を包帯で足に巻き付けようと試みた生徒もいます。

白は敵から見えやすいので着てはいけない

沖縄戦のとき、生徒たちはもちろん、陸軍病院で働く看護婦たちも白い服は着ていません¹⁰。沖縄戦が始まる前から、白は敵から見えやすく目立つため着てはいけないとされていました。

ひめゆりの生徒が白いシャツを着ている写真は多く残さ

【図 8】 女師の校章



布製。1943 年度から全国の師範学校で統一されていた。

【図 9】 一高女の校章



れていますが、それらは、沖縄戦になる前の写真です。生徒たちは、学校生活のなかで、白い運動服をよく着ていました。運動服の上着は、白い開衿の半袖シャツです。【図 2】【図 3】体操の授業や、運動、農業実習、掃除のほか、勤労奉仕や陣地構築などの動員作業のときに着ていました。運動服をいつ頃から着なくなったのかは、はっきりしません。

ハチマキは巻いていない

沖縄戦中、ひめゆりの生徒はハチマキもしていません。沖縄戦になる前の学校生活のなかでハチマキをしていたのは、運動会や、球技や陸上の練習や試合のときです。運動時に使っていたハチマキは、白い無地のものでした¹¹。【図 3】日の丸や文字などは入っていません。防空訓練や避難訓練の際もハチマキはせず、防空頭巾や三角巾をかぶっていました¹²。【図 2】

赤十字のマークを身につけていない

生徒は、赤十字のマークの入ったもの（腕章など）は身につけていませんでした。陸軍病院の看護婦も同様です。沖縄戦のあいだ、沖縄陸軍病院は赤十字のマークを掲げておらず、敵から病院とわかる表示はしていませんでした。

説明員 仲田晃子

- 1 本稿は、主に元ひめゆり学徒隊生存者の手記や証言をもとにまとめた。書籍や展示などで公開されているもののほかに、当館が所蔵する未公開の音声、映像、手記などの資料も用いた。それらの戦争体験記録のなかから服装に関する部分に当たり、ひめゆり学徒隊の服装の全体の動向を把握した。沖縄戦以前の服装については、戦前に発行されていた校友会誌『姫百合』のほか、戦後に刊行された『ひめゆり一女師・一高女沿革誌一』などの同窓会の刊行物、ひめゆり学徒隊以外の同窓生の記録も参照した。また、当館所蔵の戦前の写真や卒業アルバム（当館蔵）、米軍撮影の写真や動画（沖縄県公文書館所蔵）にも当たった。また、2024 年 3 月から 4 月にかけて、元ひめゆり学徒の仲里正子に、聞き取りや確認などで協力を得た。
- 2 本稿のきっかけのひとつは、ある書籍に掲載するひめゆり学徒隊を紹介するイラストについて、当館の学芸員が意見を求められたことだった。よく調べて描いたことがわかるものだったが、同時に、調査の対象が、映画やマンガ、イラストなどの視覚表現のなかで描かれてきたひめゆりの像であることもよくわかるものだった。この例に限らず、流通するイメージへのアクセスの容易さと比べて、これまでに、調査研究の成果や博物館の展示は参照されづらい傾向にある。あらゆる表現のなかで、服装を事実と照らして再現する必要は必ずしもないが、調査で明らかにされてきたことと、表現されたものの齟齬が、沖縄戦やその体験の認識に影響する懸念があり、調査・研究成果の公開や普及は課題となっている。
- 3 もんぺともんぺの上着は、1942（昭和 17）年に政府が提案し着用を推進した「婦人標準服」の乙型活動衣の下衣、乙型二部式の上衣と同様のもの。女師・一高女（ひめゆりの学校）では、婦人標準服の制定以前の 1939（昭和 14）年の夏から着用が始まっている（『鍛錬期間日記抄』（源武雄編『姫百合』第 15 号、姫百合会、

- 1940 年、p39-65、沖縄県女子師範学校、沖縄県立第一高等女学校『卒業記念寫眞帖』1940 年 3 月など）。婦人標準服については「新しくできた婦人標準服」（『週報』第 287 号、情報局、1942 年 4 月 8 日）など。その総体に関する研究として、横田尚美「婦人標準服の変容—婦人雑誌と服飾雑誌を資料として」（『社会文化史学』第 60 号、2017 年）がある。
- 4 米軍が撮影した白黒の記録写真や映像には、軍服よりもより白っぽく写っている。生徒のほかに、防衛隊（県内で召集された兵隊）も、襦袢と袴を着用している。
- 5 生徒たちが「西郷下駄」と呼んでいた薩摩下駄。杉材で、鼻緒は手作りした。なぜ鼻緒を手作りしたのかは、はっきりしない。1939（昭和 14）年頃から素足や下駄履きになっている。
- 6 セーラー服を着ていたのは、1944（昭和 19）年 3 月卒の一高女生が最後。
- 7 1943（昭和 18）年度から。
- 8 写真では師範と一高女とでは制服の色味が多少異なっていることが確認できる。新調した年によっても違いがみられる。布地の違いによるもの。
- 9 津嘉山の第 32 軍司令部経理部で支給されたとする記録もある（宮城喜久子『ひめゆりの少女 十六歳の戦場』高文研、1995 年、p44）。どの程度の生徒が支給を受けたかは、はっきりしない。
- 10 長田紀春、具志八重編著『閃光の中で』ニライ社、1992 年、p58。当館の奥松文子への聞き取り（2011 年 11 月）ほか。
- 11 当館所蔵の写真によると、白以外にもう 1 色あるが、競技などのチーム分けに使ったものと思われる。
- 12 1943（昭和 18）年頃。それ以前の防空訓練や避難訓練の服装については未詳。陣地構築のときにハチマキをしていたことがあるかは、はっきりしない。

仲宗根政善日記抄(68)

〔1980年〕六月二十三日 慰霊の日

昨日三時ごろ、大隅喜代志氏からの電話。十二時頃に那覇空港についたとのこと。真玉橋ノブさんが迎えに来ていませんでしたかと聞くと、今ここにいますとのこと。すぐ私のところを訪ねたいとのことでしたが、琉大病院に、平岡氏を見舞に行きたいということでしたので、病院休憩室でおちあった。

大隈〔隅〕氏はあかるく、いかにも秀才らしい。軍医殿もかんの鋭い方でしたが、そんな印象を受けた。奥さまは、私の顔を見るなり、涙ぐまれて、ハンカチで眼をぬぐわれた。なくなった夫を見とどけた現身が自分の前にあらわれているのが悲しかったのであろう。喜代志の姉で、長女の方もいっしょで、以前にも、父をたずねて、沖縄を訪ねられたという。悲しみをつつみながらも、顔はあかるく、話をつづけておられた。喜代志氏よりはお若いように見えたが、父親が戦死の頃は、十一才で、喜代志氏が小学校一年生、末の妹がまだお腹の中にあって四か月だったという。

平岡氏は、三月頃から入院しているようだが、もう幾〔ら〕かよくなって、車椅子に坐っていて、戦争中のことを話してくれた。

戦争がすんでから三十五年、さがしにさがしていた父の消息がはじめてわかったのである。最後のことがわかったからといってあきらめがつくわけでもないであろうが、やはり最後の様子はくわしく知りたいのである。

大隅軍医とは、第一外科で同じ壕の中に、いっしょにいた。重油ランプをともしていた。敵が壕のすぐ近くにせまった二十年五月二十五日の朝、軍医はいち早く壕を出て行った。福島軍医や山崎軍医の記憶ははっきりしているが、大隈〔隅〕軍医のことはあまりよくは記憶していないが、勘の鋭そうな、気のたった方で、いつも生徒や看護婦をきちんきちんしつけていた。ご遺族からお聞きすると、三十七才だったというから、私よりたった一才の年下で、副〔福〕島、山崎軍医とは年令的な差もあった。五月二十五日にわかれたとき、あれから話したことはなかった。

摩文仁に移動してから、石室の中で、軍医たちは自在鍵に薬鐘をつるして、まるで茶人が茶をたのしむように静かにしておられた。たしかあの時に大隅軍医もいっしょにいたのだと思う。もう三十五年も過ぎていたので、もう記憶もうすれてしまったが、ぽつりぽつり思い出し思い出し、お話をしあげた。

琉大附属病院から、ハーバービューホテルにいっしょに行った。長田紀春氏もやって来た。

妹たち二人を紹介して下さった。末娘の和田那美子は、まだ腹の中にあったという。私の顔を見るなり涙ぐんだ。高校生のようないいお顔である。次女的美弥子さ

んは、前にも父の後をさがし歩いたようである。親切な運転手の案内で、第一外科壕を訪ねたことがあった。その時にとった写真を見せていた。この壕です、私がお父上様と最後に別れたのはと、告げると、やはりここでしたのかと、感にたえかねていた。

三十五年にして、初めて親の最期の様子がわかり涙を流していた。

翌日二十三日は、慰霊の日。奥松文子さんが、ご遺族をご案内して、陸軍本部病院壕にある、陸軍病院軍医看護婦の慰霊祭に行った。私は、仲里マサエさんと島袋淑子さんの車で出かけた。祭場につくと、もうご遺族はついておられた。

私が植えた鳳凰木も三本やがて花の咲くほどに伸びていた。真玉橋ノブ子、奥松文子、安里良子、安谷屋、神谷、具志八重子等の陸軍病院の看護婦が来ていた。もうすでに年老いている。中心になっていた平良進氏も逝き、平岡氏も病床に臥し、わずかに、長田紀春医師と西平守正医師が健在である。県医師会も面倒を見ていないようであった。生き残った看護婦たちがほそぼそと慰霊祭をとり行っている。具志八重子さんが司会をしていたが、その声もかぼそい。第三外科でなくなられた方々への供養をわれわれはおこたっているのではあるまいか。ひめゆり〔の〕塔にねむる女子部一高女の職員先生の慰霊祭は、毎年盛大にとり行っているのに、一緒に最後をとげた第三外科の看護婦炊事婦軍医たちの霊を弔うことを忘れていた。沖縄戦没医療人の碑に花をそなえることを怠っているのではあるまいか。年々参加の人かずもすくなくなり、次第にさびれ行く慰霊祭の状況を見て、さびしさにたえなかった。

祭壇には、大隅美枝末亡人の供花が悲しく飾られていた。読経があっただけで、弔辞もない。次々と焼香に出る遺族は、白髪になり腰がまがっていた。ことばをかわすこともなく、皆だまっているだけである。



仲宗根政善の日記の一部

※読みやすさを考慮して、旧字体は新字体へ変更した。明らかな誤字は改め、脱字や送り仮名、その他必要な情報を〔 〕で補った。



仲宗根政善著『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』には、「玄関を出ようとすると、小屋につながれたままヤギがゆげをねだってしきりに鳴いていた」といった箇所が出てくる。『手記』は、小動物の鳴く場面を随所に記してある。その用法は『手記』の一つの特徴とでもいえるもので、ざっとあげていくと、「鶏舎に一羽のニワトリがコッコッと鳴いていた」とか「校庭の梅にとまったウグイスがさえずった」とか「ヒバリがさえずっている」とか「広い野原に出ると、しきりにカエルが鳴いていた」といったような具合である。

そして、その小動物の鳴き声が、戦場を際立たせていくものになっているのであるが、その中でも、印象的なものが、ヤギに関しての記述であった。

ヤギの登場して来る場面は、一度だけではなかった。「付属のヤギのことまで話していた」といったように、壕をたずねて来た知人の人となりについて触れた箇所にも出てくるし、「子ヤギの死」として、小節の見出しにもなっていた。そこには、米機の襲来で、逃げ込んだ小屋に「かわいい子ヤギが一匹」飼われていたこと、至近弾がいくつも落ち、「ヤギ小屋」が激しくゆれたこと、そして「同じ運命におののいているこの小ヤギのあいくるしい目を見ていると、付属につながれているはずのヤギのことが思いたされ」たといったことが書かれていた。それだけに、「解き放ってやる余裕もなく門を出た」ことを悔やんでいるのであるが、その悔いはさらに大きなものとなっていったことを推測させる出来事が起こっていく。

避難していた小屋を出て村へ降りて行った翌日、再度、小屋を訪れると、薪に鮮血がついていた。誰かがやられたに違いないと思って見まわすと、「子ヤギの頭がちぎられて足がちらかり、胴体は何者かに持ち去られていた」のである。『手記』は、「ヤギ」を、戦争がいかに「残虐」であるかを象徴する一挿話として、埋め込んでいたといっている。

「ヤギ」は、西平英夫の『ひめゆりの塔 学徒隊長の手記』にも、「おお、山羊が鳴いている。空襲で草をくれる者もなく飢えているのであろう。一人の生徒がいもの葉をちぎってやりに行った。ヤギはいっそう高く『メーメー』と鳴いた」といったように、また「遠くのほうで『メー』と山羊の鳴く声がした」といったように出ていた。

惨憺たる戦場を記していく中で、「ヤギ」が出て来るのは、「付属」に「ヤギ」がいて、親近感があったことによって

いたのだろうが、偶然とはいえ、「ヤギ」を序奏にして、一編の物語に仕上げたのがあった。『ヤギと少年、洞窟の中へ』である。

物語は、「少年」が、飼っていた山羊に導かれるようにして、洞窟に入っていくと、亡くなった「女学生」の幻が現れ、沖縄戦がどのようなものであったかを話していく、といった筋になるものである。「女学生」は、「兵隊さん」の世話をしながら、洞窟に潜んでいて、亡くなり、骨になり、「後生」にいけないため、お盆になっても、家に帰れないので、洞窟から骨を運び出して、「供養」してほしいと少年に話す。少年は、請け合う。「女学生」は、そこであと一つのお願いだとして、踊りを見てほしいといい、「最後の舞い」を舞う。その舞は「かぎやで風」であった。

普通「祝宴」の幕開けとして踊られる踊りが、どうしてそこで、用いられたのか、という問いは当然出て来るに違いない。いろいろな見方があるかと思うが、物語の筋からすれば、それは遺骨の家郷への帰還を祝ってのことであったととれるし、そこに、一つの喜びを見た、ということであろう。

沖縄戦の物語をどのように締めくくるか。そこには多くの苦心がある。その一つの果実とでもいえる「舞い」は、衝撃的であった。衝撃と言えば、さらに加えておきたいことがあった。「紙碑」である。「戦争で死んだ少女たち」として、一人一人の名前とともに花の絵を添えてあることで、これほど、思いの溢れているものもない。

前例をなすものに、仲宗根政善が、必死になって集め、角川本で実現させた「ひめゆりの塔に祀られた戦死者」一覧があった。「紙碑」は、『墓碑銘一亡き師亡き友に捧ぐ』を「原典」にしていると記していたが、「紙碑」が再度浮かびあげたものがあった。「宜野座の米軍野戦病院」である。「宜野座の米軍野戦病院」といえば、南風原陸軍病院に残され、死んだと思われた女生徒が収容されていたこと、しかし、やがて亡くなってしまうといったことがあって、よく知られていた。その女生徒の死もそうだが、「紙碑」は、その「病院」で死んだのが、少なくなかったことを鮮明にしている。その驚きは大きかった。女生徒たちの手記には、米軍によって命を救われた話がいくつもみられるが、「宜野座の米軍野戦病院」で多くの死者が出ていたことを知ると、いささか複雑な気持ちにならざるを得ない。「紙碑」が浮かびあげた一つである。

統計に見る2023年度

2023年度の入館者数は、2022年度比で121%の増加となりました。
ただし、コロナの影響が少なかった2019年度(491,345人)と比べると、
約77%にとどまっています。

① 入館者状況

①有料 376,159人

2022年度 310,555人より **+65,604人 121%**

うち外国人 7,046人、前年度比 +4,076人

※2021年度より、慰霊の日是有料入館

開館以来 35 年間で **32 番目**の入館者数
平均入館者：31,347人(1か月) 1,920人(1日)
開館以来 34 年間の累計：24,062,774 人
(1989 年度は開館期間 9 か月間)

②無料 24,294人

団体(県内学校団体・特別支援学校・一般団体含む) …………… 6,924 人

学校団体引率者 …………… 11,803 人

修学旅行下見 …………… 1,461 人

個人免除者(身障者手帳等提示の方など) …………… 4,106 人

※県内学校団体は入館料免除のため総入館者数には含まれないが、「2. 学校団体入館状況」(団体数・人数)には含まれる。

② 学校団体入館状況

学校団体数 1,354校/176,851人

2022年度937校、132,122人に比較すると、**+417校、+44,729人**。全体の割合は、小学校82校・6%、中学校409校・30%、高校863校・64%。前年度比で約**144%**(団体数)増加。コロナ前の2019年度1,838校(246,049人)と比較すると約73%(団体数)にとどまっている。

団体プログラム(平和講話・ビデオ視聴)のご案内

当館では、平和学習プログラム(職員による平和講話(約40分)やビデオ視聴(約30分))を提供しています。
プログラムは多目的ホールにて、団体貸切で行います。事前予約が必要となりますので、お電話にて空き状況を確認後、
FAX・Webフォーム等でお申し込みください。

▶対象：当館を見学する団体 ▶実施時間帯：9:05～16:00(最終開始時間)

- 収容人員は約200人(席)です。
- 多目的ホール使用料 1回：3,300円(同一団体2回目以降は2,200円)
- 多目的ホールは、セレモニーや会議等、上記平和学習プログラム以外での貸出は行っていません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルとなる場合もあります。

〈下記の休止期間はご予約できません〉

- 年末年始(12月30・31日、1月1日～3日)、旧盆(旧暦7月13日～15日)、慰霊の日前後(6月21・22日、24日)はビデオ視聴のみ予約可能です。
- 慰霊の日(6月23日)は講話・ビデオともに予約できません。

★2024年4月1日より会場(多目的ホール)使用料がかかります。

詳しくはホームページをご覧ください、
当館(098-997-2100)までお問い合わせください。

【会場使用料に関するお知らせ】
(PDF)はこちら



Information

- ・開館時間 9:00am～5:25pm(入館締切は5:00pm)
- ・年中無休 (台風などで路線バスが運休の場合は休館)
- ・入館料 [個人]大人450円 高校生250円 小中学生150円
[団体]大人400円 高校生200円 小中学生110円 ※団体料金は20名以上、一括払い。

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより
第73号 2024(令和6)年5月31日発行

【編集・発行】
ひめゆり平和祈念資料館
〒901-0344 沖縄県糸満市字伊原671-1 TEL098-997-2100 FAX098-997-2102

ひめゆり平和祈念資料館

検索

<https://www.himeyuri.or.jp/>

